

平成 22 年 6 月 15 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520517

研究課題名（和文） 発信力を高めるスピーキング授業モデルの構築

研究課題名（英文） Developing a classroom model for producing spontaneous speeches

研究代表者

尾関 直子（OZEKI NAOKO）

明治大学・国際日本学部・教授

研究者番号：00259318

研究成果の概要（和文）： 前持って準備をせず、タスクを行っている間に考える余裕を与えられないプレッシャーのある条件におけるスピーチを、流暢さ、正確さ、複雑さの観点から分析した。また、スピーチの直後に、質問紙調査を実施し、言語的要因（語彙、文法など）、認知的要因（プランニング、モニタリング）、情意的要因（自己効力感、不安）がスピーチにどのように影響しているかについて調査を行った。その結果、前持って準備をせず、タスクを行っている間に考える余裕を与えられないプレッシャーのある条件におけるスピーチでは、言語的要因だけではなく、情意的要因、認知的要因がスピーチの流暢さ、正確さ、複雑さに影響を与えていることがわかった。

研究成果の概要（英文）： This study investigates psychological factors that affect the accuracy, fluency, and complexity of unplanned speech in the L2 when performing under pressure. To address this problem, participants were requested to perform, under pressure, an unplanned story telling task based on four pictures. After completing the speaking task, the participants answered a questionnaire designed to assess psychological factors. Overall, the results showed that not only language proficiency but also psychological factors (e.g., positive attitude toward a task, language awareness) were related to the speech performance of L2 learners.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：第2言語習得

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：スピーキング、準備なしでのスピーチ、プレッシャーのかかる状況下でのスピーチ

1. 研究開始当初の背景

(1) 大学生がこれからの国際社会で担う役割と現状の英語力

平成 17 年 9 月に文部科学省は「文部科学省における国際戦略」を発表したが、そのなかで、「世界大競争時代における我が国の国際競争力の強化」をはかるために、国際社会で活躍する人材を義務教育レベルから育成することを提言している。また、「わが国のソフト・パワーの滋養」をはかるために日本文化の発信と文化財国際協力の推進を強調している。これは、海外の文化を理解し尊重するという受容型の日本人にとどまらず、日本の文化や情報を海外に発信でき、国際的に活躍できる日本人を養成することを重要視した提言であるといえる。大学の英語教育においても、英語を理解する力だけではなく、日本の文化や情報を海外に発信できる英語力を養成することが必要であると思われる。

英語でメッセージを発信するには話す力と書く力が必要であるが、日本の大学生は英語の 4 技能のなかでも話すことが苦手である学生が多く、また学生自身もそのことを自覚しており、大学の英語の授業により、特に話す力を上達させたいと思っている学生が多くいる (JACET 英語実態調査委員会, 2006)。

大学生の多くは、あらかじめ話す内容を準備し、リハーサルをすることが可能であれば、ある程度の正確さ、流暢さ、複雑さを伴ったスピーチやプレゼンテーションを行うことができるかと繰り返し報告されている (Bygate, 1999; Ellis, 2003, 2005; 尾関, 2004)。このことは、研究代表者と研究分担者がこの 6 年間行ってきた学習ストラテジー指導を取り入れた英語授業の指導法とその実践結果からも明らかになっている (学習ストラテジー研究会, 2005, 2006)。しかしながら、話すことをあらかじめ準備する時間がほとんど与えられず、話している間にじっくりと考える時間もない教室内での質問に対する返事や会話などにおいては、学生たちは、単語のみ、もしくはフレーズのみで答えることが多い。さらには、自分の意見を述べたり、文章で物事を解説したりする発信力は乏しいように見受けられる。

(2) スピーキング・タスクとプランニングに関する先行研究の成果と限界

スピーキングに関する先行研究では、学習者がタスクを行う前に行うプランニング (pre-task planning) や学習者がタスクを行っている最中に行うプランニング (within-task planning) がスピーチ・プロダク

ションにどのように影響するかについて多くの研究が行われている (e.g., Ellis, 2003, 2005; Nitta, 2005; Ortega, 1999, 2005; Skehan, 1998)。

タスクを行う前のプランニングに関しては、タスクを繰り返しリハーサルすること (rehearsal) と、話す内容をどのように言語化すればよいのかを考えるプランニング (strategic planning) に分けられる。タスクをリハーサルする機会を与えられた場合は、スピーキングの正確さ、流暢さ、複雑さのすべてが向上する (Bygate, 1999)。また、10 分程度、どのように話せばいいのか、タスクを準備する時間が与えられれば、スピーキングの正確さについては明確な効果は見られないが、流暢さ、複雑さは増すことが指摘されている (Crookes, 1998; Foster & Skehan, 1996; Yuan & Ellis, 2005)。

また、タスクを行っている最中のプランニングに関しては、通常、話しながら何を言うかを考える時間がある場合と、考える時間がない場合の 2 つに大きく分けられる。タスクを行っている間に、何を言うかを考える十分な時間が与えられるプレッシャーが少ないタスクでは、スピーキングの流暢さは向上しないが、複雑さと正確さが増すことが明らかになっている (Ellis, 1998; Yuan & Ellis, 2003)。

一方、タスクを行っている間に、何を言うかについて考える十分な時間が与えられない、プレッシャーがかかるタスクについては、今のところプレッシャーの少ないタスクとの比較で、いくらか研究対象となっているが、このようなタスクの質を向上させるために、どのような指導を行えば良いのかという問題に関しては、ほとんど報告されていない。

2. 研究の目的

先行研究により、リハーサルをしたり、タスクを行う前に 10 分程度のプランニングの時間を与えたり、タスクを行っている最中に十分な時間を与えると、スピーチ・プロダクションの言語の「正確さ」、「流暢さ」、「複雑さ」になんらかの効果があることは実証されている。しかし、このような研究結果は、会話や教室内での質疑応答などの、あらかじめ何を話すのかを考えるプランニングの時間があまりなく、プレッシャーがかかる状況下でのスピーキングをいかに向上させるかについては、有益な示唆を提供していない。

大学生が教室内での質問に、ある程度の長さのある文章で答えたり、説明したりする能力に劣るのは、現在のところ、単に十分な英語力が身につけていないためであると言われている。第二言語習得理論に基づき、学習者のレベルを

考慮したインプットを大量に与え、インタラクションの機会を多くすれば、学習者の第二言語習得は促進するという理論 (e. g., Long, 1983; Pica & Doughty, 1985) は妥当であろうとされている。しかし、大学の限られた英語の授業時間で学習者の発信力の養成に目標を絞った場合、どのような状況で、どのようなインプットをどの程度与え、アウトプットを引き出せば、発信力を養成することができるのかは明らかにされていない。そこで、本研究では、次の3点について調査を行った

- ① 話す前にプランニングをする時間があまりなく、話している間に何を話そうか考える余裕がないプレッシャーのかかる状況下での会話や質疑応答において、文レベル以上の発話ができ、なおかつ物事を解説できるようなスピーキング力を養成するには、具体的にどのような言語材料や要素が必要であるのかを明らかにする。
- ② 学生たちは、発話をするときに、どのような学習ストラテジーを使っているのか、その使い方や種類を明らかにする。また、発話に有効な学習ストラテジーを明らかにする。
- ③ 動機づけをはじめとする情意的要因がどのように発話に影響するのかを明らかにする。

最後に、上記の結果を踏まえて、どのような授業をすれば、学生の発信力を養成できるのかについて検討する。

3. 研究の方法

(1) 調査1

目的: 言語的、認知的、情意的要因が、プランニングがなく、なおかつ考える余裕がない状況における発話に与える影響を調査する。

被験者: 研究責任者の勤務校の大学生 15 人

調査方法: インタビュー

スピーキング・タスク: 制限時間の5分以内に4枚の絵を見て物語を作る (Heaton, 1975)。

あらかじめ十分な準備をする時間がなく (1分間のみ絵を見る時間が許される)、なおかつスピーキングを行っている間に何を言うかを考える時間を与えられない、プレッシャーのかかる状況下においてタスクを行った (Ellis & Yuan, 2005)。学生たちの発話を録音し、大学院生のアルバイト (5名) に協力を依頼し、文字化した。このデータは、AS-unit で分析し、発話の長さを測った。

また、タスクを行った直後に、被験者 15 人にインタビューを実施した。質問内容は、大きく分けると、言語に関する質問、認知に関する質問、情意に関する質問の3分野にわたった。例えば、言語に関する質問では、スピーキングができなかった理由は、語彙不足

によるのか、言語構造を知らなかったためか、もしくは、そのトピックの背景知識が不足していたためかを調査した。認知に関する質問では、主にメタ認知ストラテジー、認知ストラテジーを中心にどのようなストラテジーを、タスクを行うために使用したのかを尋ねた。また、情意に関する質問では、学生がどのような動機づけや自己効力感をどの程度もっていたかを調査した。

(2) 調査2

調査1のインタビュー結果をもとに、スピーキングを困難にしている言語的、認知的、情意的要因を調査する質問紙を作成する。

目的: 調査1の結果を生かした質問紙を作成し、言語的、認知的、情意的要因が、プランニングがなく、なおかつ考える余裕がない状況における発話に与える影響を調査する。

被験者: 社会系、人文系、理系専攻の学生各 100 人、計 300 人

調査方法: 質問紙

質問紙の質問のうち、言語的な質問項目については研究分担者の大和、認知的な質問項目については研究代表者の尾関、情意的な項目については研究分担者の廣森が中心となり作成した。研究チームメンバーはそれぞれの分野で専門知識があるので、妥当性と信頼性がある質問紙を完成させることができると考えた。

(3) 調査3

目的: 調査2で完成した質問紙を使い、言語的、認知的、情意的要因が、プランニングがなく、なおかつ考える余裕がない状況における発話に与える影響を調査する。

被験者: 経営学専攻の大学生 33 名

調査方法: 調査1と同じように制限時間の5分以内に4枚の絵を見て物語を作るタスクを使用した (Heaton, 1975)。あらかじめ十分な準備をする時間がなく、なおかつスピーキングを行っている間に何を言うかを考える時間を与えられない、プレッシャーのかかる状況下においてタスクを行った (Ellis & Yuan, 2005)。学生たちの発話を録音し、文字化した。また、タスクを行った直後に、被験者全員に、調査2で完成した質問紙を使い調査を行った。

分析方法: 文字化されたデータを使い、発話の正確さ、流暢さ、複雑さを調査した。正確さを測る指標として、スピーチのワード総数に対するエラーの割合、AS-unit の総数に対するエラーの割合、の2つの指標を使った。流暢さを調べるためには、1分間に発せられたシラブルの数、1秒以上の沈黙がワード総数に占める割合、の2つの指標を使用した。また、複雑さを測るために、AS-unit に占める句の割合、スピーチに使われた異なる動詞の形の合計数、の2つの指標を使用した。

また、質問紙調査から明らかになった、スピーチに影響を与えていると思われる5つの心理

学的要因 (①不安, ②タスクに対する肯定的な態度, ③自己効力感, ④自己監視, ⑤言語認識) とスピーチの正確さ, 流暢さ, 複雑さ, また, 外部英語能力試験で測った言語習熟度との関係を調査した。

(4) まとめ

調査1, 調査2, 調査3を通して, スピーキング力が不足しているのは, 言語的な要素である「語彙不足」, 「言語構造の知識不足」, 「トピックについての知識不足」などが原因であると学生は考えているのか, 認知的な要素である「プランニング」, 「問題解決力」, 「モニタリング」などが不足しているのか, もしくは, このタスクに対する動機づけが低いことが原因なのかがわかることになる。

4. 研究成果

調査1, 調査2, 調査3から以下のことが明らかになった。

- ① 学習者がタスクに対する肯定的な態度を持っているとスピーチの正確さが増した。
- ② 言語習熟度が高い学習者は, スピーチの正確さが増した。
- ③ 言語に困難さを感じている学習者は, スピーチの正確さが増した。おそらく, 言語に困難さを感じている学生はタスクに対して慎重さが増すからだと思う。
- ④ 言語に困難さを感じている学習者は, スピーチの流暢さが減少した。
- ⑤ 言語習熟度が高い学習者は, スピーチの複雑さが増した。
- ⑥ 学習者がタスクに対する肯定的な態度を持っているとスピーチの複雑さが減少した。おそらく, あまりにもタスクに夢中になり, より複雑な文章を作ることに注意が向かなかったからだと思う。

以上のことから, 言語習熟度のみがスピーチの正確さ, 流暢さ, 複雑さに影響を与えているのではなく, 他の心理的要因もスピーチに影響を与えていることがわかった。

今後の研究課題

母語話者のためのスピーチ・プロダクションモデルでは, 心理学的要素は排除されて考えられているが, 本研究により, スピーチには, 言語的要素だけでなく, 心理学的要素が影響を与えていることがわかった。この研究をもとに外国語学習者のためのスピーチ・プロダクションモデルを開発したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① Tomohito Hiromori. (2009). A process model of L2 learners' motivation: From perspectives of general tendency and individual differences. *System*, 37, 313-321.
- ② Naoko Ozeki・Tomohito Hiromori・Ryusuke Yamato. (2009) What are learners thinking about while they were performing a task? *Proceedings of the Seventh Annual Hawaii International Conference on Education*, 2079-2081.
- ③ Naoko Ozeki. (2007). Project work designed to develop learners metacognition. *Annual Review of English Learning and Teaching (The JACET Kyusyu-Okinawa Chapter)*, 12, 61-66.
- ④ 廣森友人. (2007). 「タスクに対する取り組みと動機づけ」『*四国英語教育学会紀要*』, 第27号, 1-10頁

[学会発表] (計9件)

- ① 廣森友人. 「動機づけ研究の観点から見た効果的な英語指導法」, 関西英語教育学会第18回セミナー, 2009年12月20日, 京都キャンパスプラザ
- ② Naoko Ozeki. 「The effects of psychological factors on L2 speech production」 The 18th International symposium and Book Fair on English Teaching (ETA-ROC), 2009年11月14日, 台湾.
- ③ Ryusuke Yamato. 「The Strategy Orientation of Language Teaching (SOLT): Development of an observation instrument for strategy-supported language instruction」 The Asian Conference on Education 2009, 2009年10月24日, Osaka.
- ④ 尾関直子, 廣森友人. 「Psychological effects on L2 learners' speech production」 大学英語教育学会全国大会, 2009年9月5日, 北海学園大学
- ⑤ 大和隆介. 「種々のプランニングがStory-rewritingタスクに与える影響」, 第35回全国英語教育学会, 2009年8月9日, 鳥取大学
- ⑥ 尾関直子. 「自律学習とタスク活動」, LET中部大会基調講演, 2009年5月23日, 愛知教育大学
- ⑦ Naoko Ozeki・Tomohito Hiromori・Ryusuke Yamato. 「What are learners thinking about while they were performing a task?」 7th Hawaii International Conference on Education. Hawaii, 2009年1月6日, Hawaii.
- ⑧ Naoko Ozeki. 「Project work to develop learners' metacognition」, In search of good practice: Learning strategies and learning tasks in EFL/ESL. 第21回大学英語教育学会, 九州・沖縄支部大会, 2007年7月7日, 久留米工業大学.
- ⑨ 尾関直子. 「大学英語カリキュラムの現状と未来: 異なる教育組織からの展望」, 第2回大学英語教育学会関東支部大会, 2007年6月24日, 立教大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

尾関 直子 (OZEKI NAOKO)
明治大学・国際日本学部・教授
研究者番号：00259318

(2) 研究分担者

大和 隆介 (YAMATO RYUSUKE)
京都産業大学・外国語学部・教授
研究者番号：60298370

廣森 友人 (HIROMORI TOMOHITO)
立命館大学・経営学部・准教授
研究者番号：30448378

(3) 連携研究者

()

研究者番号：